

生涯忘れ得ぬ悔しさ



大館消防署 副署長

稲葉 貞一さん
(57歳)

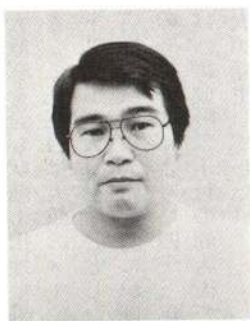
昭和四十三年十月十二日午前十一時十六分ころ「御成町二丁目火災発生」の報に接し、本署速消第一号車の小隊長として出動しました。

現地に着いたとき、地面をほうような火炎と噴煙で進入困難な状況でした。決死の筒先突入で消火活動をしましたが、多量の天然乾燥製品に燃え移り一気に炎上。火面がさらに拡大、このときすでに大火の様相を呈していました。その後、強風にあおられ急激な火煙が渦を巻き、徐々に火勢に押されて鎮圧は不可能と判断、後退を余儀なくされました。そのときの悔しさは、生涯忘れ得ぬことです。

午後二時三十分、ようやく鎮火することができましたが、この三時間余の火魔との闘いは、消防人として苦い体験でした。通報の遅れ、強風と湿度の低下、木製可燃物の多量集積、木造家屋の密集、外周道路の狭あ

い、風下進入路の皆無など、消防活動が意のままにならなかったことが大火となった主因として挙げられると思います。この苦い体験を生かして、また糧として、この二十年間消防活動と消防行政に努めてきましたし、今後も微力ながら寄与する覚悟です。

もう火事はいや!



木村 孝雄さん
(34歳)

御成町二丁目

あれは私が中学校二年のときでした。三時間目の授業が終わったころと記憶しています。「二丁目の方が火事だ!」という同級生の声に、驚いて窓からのぞ

いてみると、白っぽい煙が見えました。そのときは、自分の家が焼けるなどとはまったく考えませんでした。見るまに煙はだんだんと黒くなり広がって

きました。四時間目が始まってまもなく、「全校生徒は校庭へ避難するように」という校内放送が流れ、私たちは先生に誘導されて校庭へ。しかし、家のことが心配でいてもたってもいられず、先生には黙って家へ走って帰りました。

家は無事でした。五十メートルくらい離れたところが焼けていたので、「自分の家は絶対にだいじょうぶ」と思い、二階の自分の部屋へ入ったんです。そうしたら間もなく、下の方がさわがしくなったのでのぞいてみると、みんな荷物を出して

ました。あわてて外へ飛び出すと、なんと火がすぐそばまでせまっているではありませんか。部屋から自分の物を出すひまなく逃げました。今考えてみるとなぜ部屋に入ったときに、大事な物だけでも持ち出せるよう準備しておかなかったかと悔まれます。

大火のときの火のまわりの速さには本当に驚かされました。あれ以来、私の家では自然に火の元を十分注意するようになりました。もう二度と火事はいやですからね。

御成町2丁目大火 火魔の恐怖



◀ 出火から10分後



◀ 出火から30分後



◀ 出火から50分後

(写真提供 大館市周辺広域市町村圏組合消防本部)